様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６４６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ００１３２

研究課題名（和文）琉球王国の儀礼芸能の再現に関する芸能史的研究

研究課題名（英文）A Historical Research for the Realization of the Court Music & Dance in the Ryukyu Kingdom

研究代表者
金城　厚（Kaneshiro, Atsumi）

東京音楽大学・付属民族音楽研究所・教授

研究者番号：５０１８３２７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究課題は、近世琉球王国の国家的イベントであった御冠船踊の諸芸能が、舞台上でどのように上演されたかについて明らかにすることを目的とした。
『校注琉球戯曲集』のほか、『冠船躍方日記』等の新史料の記述を照合して考察し、さらに演奏家、舞踊家らの実演上からの意見を採り入れつつ考察を進めた結果を踏まえて、国立劇場おきなわの協力も得て、舞台上演を実現できた。また、御冠船踊りの中で形成された組踊の音楽様式について明らかにし、同じく琉球舞踊の構造分析について、また、三線音楽の創作性について、さらには、関連する爬龍船競漕の舞台裏や、御茶屋御殿の役割等についても、史料研究等によって明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
この研究は、学術的には、史料の少なかった琉球芸能史に対し、新史料を活用することによって新たに多くの知見を加え、琉球芸能史研究を大きく前進させる意義をもつ。
また、実演に向けての活用するための研究であるので、今後、組踊の上演や、とりわけ新作組踊の制作に寄与すると思われる。また、舞踊や三線音楽公演の舞台演出にも活用されるだろう。さらに、御茶屋御殿の実態についての新たな知見を加えたことにより、現在進行している御茶屋御殿復元の運動に寄与すると思われる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research project was to clarify how the various stage performing of the Okansen-odori, which was a national event of the early-modern Ryukyu Kingdom, were performed on stage.
In addition to known historical materials, we collated and examined the descriptions of newly released historical materials, and furthermore, we proceeded with our consideration while incorporating the opinions of musicians and dancers from their performances.Based on the results, we were able to realize a stage performance with the cooperation of the National Theater Okinawa.In addition, we will clarify the musical style of Kumiodori formed in the Okansen-odori, the structural analysis of Ryukyu dance, the creativity of sanshin music, the dragon boat race, and the role of the Ochaya palace,the king's villa has also been clarified through historical research.

研究分野：民族音楽学

キーワード：御冠船踊　琉球舞踊　三線　組踊　爬龍船　戯曲

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

沖縄は 14 世紀から 19 世紀までの 500 年間、「琉球」という独自の王国文化を築き、中国から冊封を受けつつ、日中両国との外交関係を維持してきた。この王国の文化の中で、琉球語による固有の文学を土台にして、楽器・三線を中心とした独特の音階とリズムを使った宮廷音楽が嗜まれ、独特の舞踊や組踊などの諸芸能を創出してきた。

しかしながら、1945 年の沖縄戦の戦火によって、古都首里と沖縄本島主要部のほとんどが焼き尽くされ、芸能関係の資料も灰燼に帰した。そのため、戦後の琉球芸能史研究においては、多くは中国や日本（幕府等）の史料に頼るほかなく、琉球・沖縄の視点からは、当時生き残った人々の記憶や言い伝えをなぞった研究にならざるを得ず、琉球芸能が近世・琉球王国の時代にどのように形成されたかについての知見はきわめて乏しい。

平成の時代になって、東京在住の王家の子孫が、独自の努力で東京空襲から保護してきた王家伝来の財物・古文書を那覇市歴史資料館に寄贈したことから、これまでになく多くの史料が一般研究者の目に触れるようになり、琉球芸能史研究は新たな局面に入った。

とりわけ、宮廷内外で行われていた儀礼芸能の姿について、一般社会からも多くの関心が寄せられるようになった。「国営公園」となった首里城でも、これを運営する財団が、往時の宮廷儀礼を再現したと称するイベントを幾つか企画・上演しているが、いずれも昭和期までの芸能史研究に依拠したイメージによる演奏・演技であり、新たな史料によって得られつつある知見とは矛盾する演技・演出も数多い。新史料を活用した、より実証的な視点による芸能再構成への努力が求められている。

２．研究の目的

本研究は、琉球の宮廷芸能に関する新しい史料を多角的に読み解くことによって、御冠船踊の舞台や、江戸立ち（江戸上り）、あるいは首里城内での定例的な朝賀礼などの過程で、音楽・芸能がどのように演じられたか、その芸態を明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

（１）近年、アプローチが容易になった複数の史料を既知の史料と組み合わせて、芸能上演の実像を浮かび上がらせるという方法をとる。例えば、御冠船踊のマネジメントの記録である『冠船躍方日記』、諸儀式中の奏楽の手順を記録した『御礼式日記』、重陽の宴における船漕ぎの歌の準備を記録した『冠船爬龍舟方日記』、宴の最後に披露された花火を記録した『火花方日記』、また「礼式」に先立つ路次楽の状況を補うために、江戸立ち（江戸上り）の路次楽に関する史料『議衛正日記』、さらには 18 世紀に土佐まで漂流した王府使者からの聴取を記録した『大島筆記』について、読み合わせ検討会を行う。

（２）さらに、こうした旧来の正統的な歴史研究方法とは別に、芸能実演家や舞台技術者、舞台制作者等、現場の実践者の意見・経験も加えて、より多岐にわたる専門分野関係者による多角的な知識・経験を組み込んだ研究を行う。同じ記事であっても、実演者の観点で解釈すると、新たな知見が生まれ、技術的に可能／不可能を判断することで、解釈の選択肢を絞り込むこともできるからである。

４．研究成果

（１）音楽面から観た組踊のさまざまな様式性を明らかにすることができた。唱えについて、従来は、男女の違いや、人物の身分の違いを示す唱え分けがあることは知られていたが、今回、男女の問答の部分で、歌掛けの技法、すなわち、相手の句を使って返しをする技法が効果的に使われていることを明らかにした。

（２）組踊の「出羽」の音楽に、登場人物を象徴する様式性があることが明らかとなった。また、組踊の劇中で、人物の思いを表現する音楽に、中国の戯曲で広く用いられている曲牌体（既存の有名曲を暗示的に使って劇的効果を高める）や、板腔体（変奏技法によって曲が表現する雰囲気を大きく変えて劇的効果を高める）などの手法が使われていることが明らかになった。これにより、組踊の成立には、従来指摘されていた日本の能からの影響だけでなく、中国の戯曲から採り入れた要素も、今後さらに研究すべきである。

（３）18世紀の玉城朝薫以降に始まった新しい舞踊では、古来の輪踊りに対して、舞台上を直線的に往復する踊りに変化したとみられるが、この「行く」と「戻る」の動きが、伴奏音楽の楽節構造に対応して「緊張」と「弛緩」による形式性を生み出していることを明らかにした。

（４）琉球箏曲の起源について、戌の御冠船の段階で箏が歌三線と合奏していることを確認できた。また、その伝承者についても仲本家一族（興斉興斉ら）が担っていたこと、彼らが入子拍子の指導も担っていたことが明らかにできた。これにより、入子躍が薩摩方面の影響を強く受けている可能性が大きくなった。

（５）琉球の組踊において地謡を担当する歌三線について、中国の戯曲音楽で一般的な変奏・編曲方法である「放慢加花」の技法が使われていることを明らかにした。例えば、組踊「銘苅子」では、素朴で単純な〈遊子持節〉を放慢加花することにより、長大で叙情的な〈子持節〉が生み出されていることを指摘したが、このような変奏・編曲が「節変わり」と呼ばれて、さまざまな歌三線音楽のレパートリー拡大に使われていた史実を、18世紀中葉の『大島筆記』と『屋嘉比朝寄工工四』によって確認した。

（６）毎年旧暦五月に那覇港で行われる爬龍船競漕と、御冠船の重陽宴に際して首里の龍譚池で行われる爬龍船漕航との差異が明らかになった。重陽宴では旗持ちや歌い手について若衆が担当する。また、重陽宴のために那覇港から首里の高台まで、首里の男たちを動員して、舟を担いで陸送するイベントの様子が明らかとなり、これが現在、泊、大嶺、小湾に伝承されている「地バーリー」の起源に結びつくと思われる。

（７）王国の別荘である「御茶屋御殿」の機能が明らかとなった。従来、御茶屋御殿は王族が公務を離れて寛ぐ場所として、あるいは冊封使が遊覧して芸能鑑賞する場所として知られてきたが、その外に、王家の私的な祝儀に芸能で祝賀する場でもあったこと、御冠船踊りの

ための楽器や保管庫であり、組踊小道具の保管庫でもあったこと、獅子舞の稽古場でもあったことなど、さまざまな音楽・芸能のための空間であり、言わば国家の音楽センターのような役割をもっていたと考えられる。このことは、現在進行している御茶屋御殿復元の住民運動にも寄与すると思われる。

（８）以上の研究成果を踏まえ、今回の研究課題ではこれを実演によって確認することを試みた。なかでも「入子踊り」については2019年に公演しているが、これを再検討し、「道行き」の振付を見直し、『校注琉球戯曲集』に記された唱歌譜のリズムをより〝沖縄らしく〟強調したステップの振付を試みた。これは国立劇場おきなわの全面的協力により、同劇場の「研究公演」として実現した。

また、歌三線音楽の変奏等による劇的効果について、本研究費の一部を使って演奏会「組踊『銘苅子』を聴く――三線演奏と解説」を開催し、放慢加花の効果や、移調による劇的効果などを聴き比べ、研究成果を解説した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 金城厚	４．巻 27
２．論文標題 琉球舞踊における「行く」と「戻る」の対立―音楽分析の視点から―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 比較舞踊研究	６．最初と最後の頁 33-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 金城厚	４．巻 10
２．論文標題 近世琉球における音楽用語「節がわり」について	５．発行年 2021年
３．雑誌名 伝統と創造	６．最初と最後の頁 13-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 金城厚	４．巻 47
２．論文標題 現地調査録音テープの公開方法に関する研究―沖縄民謡調査録音データベースから	５．発行年 2022年
３．雑誌名 民俗音楽研究	６．最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 金城厚	４．巻 1
２．論文標題 琉球古典箏曲《源氏節》と御船歌の音楽的関係	５．発行年 2022年
３．雑誌名 琉球古典箏曲記録調査報告書	６．最初と最後の頁 63-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 金城厚	4．巻 11
2．論文標題 「冠船踊方日記」にみる御茶屋御殿の役割	5．発行年 2022年
3．雑誌名 伝統と創造	6．最初と最後の頁 11-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 金城厚	4．巻 12
2．論文標題 那覇市大嶺の「地バーリー」と御冠船における爬龍船競漕の関係	5．発行年 2023年
3．雑誌名 伝統と創造	6．最初と最後の頁 33-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 金城厚	4．巻 1
2．論文標題 御冠船踊における「入子躍」の意味と音楽	5．発行年 2023年
3．雑誌名 国立劇場おきなわ芸能資料集 冠船躍の音楽	6．最初と最後の頁 58-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

1．著者名 金城厚	4．発行年 2022年
2．出版社 榕樹書林	5．総ページ数 326
3．書名 琉球の音楽を考える―歴史と理論と歌と三線	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	高瀬　澄子 (Takase Sumiko) (60304565)	沖縄県立芸術大学・音楽学部・教授 (28001)	
研究分担者	鈴木　耕太 (Suzuki Kouta) (70786904)	沖縄県立芸術大学・芸術文化研究所・准教授 (28001)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関